足羽という地名

杉原丈夫

斎宮に任命された皇女が伊勢へ下る道筋は、都が大和にあったころは、伊賀北部の山路を踏み分けて鈴鹿山の南へ至るコースであった。しかし都を山城に移してからは、近江路を南下し、甲賀の山を越えて伊勢平野にはいった。だがこの道はなかなかの難路なので、政府は延暦年間に新道の工事を始め、九十年後の仁和二年（八八六）五月ようやく完成した。

新道は後世の東海道であって、近江の土山から鈴鹿を越えて伊勢の坂下に至る。当時この道はなぜか阿須波（アスハ）道と名付けられた。ある学者は、アスハのアスはがけ崩れのことだという。だが上古の鈴鹿にがけ崩れがあったという証跡もない。仮にあったとしても、京から伊勢の神宮へ至る新しい道をわざわざがけ崩れ道という悪名で呼ぶとは考えにくいことである。山にちなんで命名するならば、鈴鹿道という名で十分である。おそらくアスハ道はそれよりもさらに美しい意味を有していたのであろう。

春日と書いてカスガ、飛鳥と書いてアスカと読ませるのは、春日（はるひ）のカスガ、飛ぶ鳥のアスカという枕詞による。春の日がかすむのはわかるが、飛ぶ鳥がなぜアスカなのか明らかでない。アスカのアスもがけ崩れだという説さえ出る始末である。

昨年吉田金彦氏が『古代日本語をあるく』（弘文堂）で新しい見解を提示した。ａｓという語根から足、遊ぶ、浅いなどの語が派生している。アスカは足処であって、足跡を印した処という意味である。アスカの里は帰化人がたくさん来て定住した処である。その帰化人を飛ぶ鳥になぞらえ、飛ぶ鳥のアスカとは「帰化人が飛ぶ鳥のように渡来して、足跡を印し文化を開いた処」ということだという。

飛ぶ鳥を帰化人というのは、少し考え過ぎのようである。帰化人のことはともあれ、飛ぶ鳥の足処という説は一考に価する。同じアスカでも河内のアスカは、最初は大和のアスカと同じように飛鳥と書いたが、やがて安宿と書き改めた。飛ぶ鳥が足をとどめ、安らかに住まう処という意味である。

アスカの枕詞が、吉田氏の説のごとく、飛ぶ鳥の足という意味であるならば、この枕詞を越前の足羽にも付けてよいであろう。ただそのような用例が古歌に見えないのは、越前足羽という土地が万葉の歌人の歌枕になるほどの風雅な場所でなかったからである。

古代の越前人がアスハに足羽という字を当てた心底には、アスは足であるという語源意識があったからであろう。アスハとは、アスカと同じように、飛ぶ鳥が足をとどめ、やすらい住む処という語義であったのかも知れない。少くとも、アスハはがけ崩れの地だという説よりはましである。

山のがけ崩れの現場にアスという名があるのならばともかく、上古の人はその山にさえアスハという名を付けず、広い郷名や郡名をがけ崩れと呼称するのは理に合わない。それに足羽山は現在けわしいがけになっているが、あれは石工たちが長い年月の間石材を切りとったからである。上古の足羽山はもっとなだらかの山容であったはずである。